

戦後六十年

あこのころの川越

昭和二十年八月十五日正午、昭和天皇の終戦を告げる内容の放送が全国に流れ、戦争が終わりました。

ことは終戦から六十年。幸い、大きな戦災を受けることがなかった川越。それでも戦時中、空襲警報のサイレンにおびえながら、毎日を過ごしていました。

この企画記事では、当時川越で過ごした皆さんの話から、あらためて平和について考えます。



火薬を詰める前の手りゅう弾（上）と地雷（下）の陶製容器。市内の工場で加工され、戦場に送られました。どちらも神藤長三郎さんが所有しています

満州事変から
太平洋戦争開戦まで

昭和六年、南満州鉄道爆破事件をきっかけに満州事変が起きました。これをきっかけに、日本は戦時体制へと進んでいくことになります。

同七年に起きた五・一五事件、同十一年の二・二六事件を経て、同十二年七月七日、蘆溝橋事件をきっかけに、日中戦争が始まりました。

戦争が長期化するにつれて、国内では徐々に物資が不足し始めます。同十三年には国家総動員法が公布されました。これにより、国民に戦争協力を強いるために、物資・財源など国のすべてを国家の統制下に置き、制限を加えました。

外交上でも、日本と米国・英国との関係が悪化していきます。

同十四年九月には、ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まりました。

第二次世界大戦開戦と前後して、国内では、ネオンの全廃、学生の長髪禁止、パーマの廃止、食料や日用品の切符制・配給制が導入され、日常生活への影響がじわじわと始まりました。

同十五年九月、日本軍は米国・英国などから中国への援助ルートを遮断するため、フランス領インドシナ（現在のベトナム・ラオス・カンボジア）の北部に進駐を開始します。そして、ド

イツ・イタリアと三国同盟を結びました。

この二つの出来事により、米国・英国の両国と日本の関係はいつそう悪化します。

同十六年七月、日本軍がフランス領インドシナ南部に進駐すると、米国は対日石油輸出全面禁止という経済制裁に踏み切りました。

米国との関係改善を日本政府は望んでいましたが、交渉は決裂し、同年十二月八日、マレー半島のコタバル上陸開始とハワイ真珠湾攻撃により、太平洋戦争が始まりました。

川越にあった軍需工場

戦火の拡大に伴い、各地に軍需工場が建設されました。

市内でも、南古谷地区（当時は南古谷村）の萱沼に、「浅野カーリット」という軍需工場がありました。同十四年ころに操業を開始し、約十萬坪の土地に弾薬を製造する工場や火薬庫などの建物が並んでいました。現在の萱沼の東側のほぼ半分と久下戸の一部が工場の敷地だったといわれています。周辺の道路は砂利道でしたが、工場内はコンクリートで舗装されていました。

当時この工場にかかわりのあった、萱沼に住む四人の方に話を伺いました。

「火薬庫や工場は敷地の奥の方にあ

って、周りは大きな土塁で囲まれていました」と話すのは、搬入や搬出に携わった、黒須博太郎さん（83歳）です。土塁は、建物が隠れるくらいの高さで、約五十メートル四方、幅約九メートルあったそうです。爆発事故を最小限に抑えるために作られ、工場造成の際に余った土を使っています。

「出勤の時に守衛所で、タイムカードのような物を押して、帰りにも押していた」と昭和十六年から約二年勤めた、江尻ふささん（85歳）。

工場で働く工員たちは、バスで工場まで通ってきていました。川越市街から通ってくる人が多かったそうです。荒川の対岸、旧大宮市から通っている人もいました。

敷地内には全工員が一度に食事が取れる休憩所があり、お昼には持参した昼食を食べていたそうです。敷地に隣接して社宅もあり、管理職など工場の責任者の人たちが住んでいました。

何が作られていたのか

江尻さんは、柄付き手りゅう弾の製造に携わっていました。「長い管に薬品を詰めていました。当時は三百人くらいの人が働いていたと思います」。

黒須（博）さんは、「農作業の合間に火薬の搬入や完成した製品の搬出をしていました。柄付き手りゅう弾は、青い箱に入れられドイツへ送り、第二

次世界大戦のヨーロッパ戦線で使われた」と聞いたそうです。

黒須（博）さんの弟・静雄さん（80歳）は、発煙筒を作っていました。「治水橋の下流で発火試験をやっていました。手りゅう弾などの試験も年に行われていましたので、周辺は草が生えていない状態でした」。

当時小学生だった神藤長三郎さん（71歳）さんは、工場で作られた製品

の搬出と材料の搬入の手伝いをしていました。

「昭和十九年に兄が出征したあと、手伝うようになりました。南古谷駅まで牛車で製品を運んで、貨車に積みみました。帰りは運ばれてきた材料を牛車に積んで工場に戻りました」。

トラックは一台しかなかったため、それ以外の運搬手段として牛車を使うしかなかったそうです。牛車を引く牛は、周辺の農家で農耕用として使われていました。

敷地内に手りゅう弾や発煙筒などを作る工場は、三つありました。江尻さんが作っていた柄付き手りゅう弾は第三工場、発煙筒は第二工場で作られていたと、黒須（静）さんは記憶しています。そのほかには、導爆線を作っていました。これは、飛行場などを造成する際に、じゃまになる木を倒すため、東南アジアのジャングルで使われていたようです。

そして、物資が不足し始めると、金属製に代わり、陶製の手りゅう弾・地雷が作られるようになりました。

全国の焼き物の産地から集めた陶の容器に工場で信



発火試験場での1枚。後に見えるのが治水橋。発火の試験でいつも使われていたため、草が生えていません（江尻ふささん提供）

管と火薬が詰められ、戦場へと送られていきました。

陶製の手りゅう弾・地雷を神藤さんは知っていて、「箱におがくずを詰めて梱包していた」そうです。

江尻さんと黒須（静）さんは見た記憶はない、と話しています。江尻さんは同十八年ごろに退職しており、黒須（静）さんは同十九年冬に中国へ出征しているため、そのあとから作られた物と考えられます。